



京大広報

No. 618

2006.12



京都大学同窓会設立総会，ホームカミングデイの開催
—関連記事 本文2274ページ—

目次

変節期の京都大学に寄せて
研究・財務担当理事・副学長 松本 紘……2272

〈大学の動き〉
京都大学同窓会発足……2274
「湯川秀樹・朝永振一郎生誕100年記念シンポジウム
—「知」に挑む—荒野をひらく力」……2276
シェフィールド大学，マンチェスター大学，ミュンヘン
工科大学，国立清華大学との学術交流 ……2276
「学生部 危機対応計画」について ……2277
平成19年度大学入学選抜大学入試センター試験
の実施……2278

〈部局の動き〉
京セラ文庫『英国議会資料』開設式を挙行……2278

〈寸言〉
「夢あれば道が拓ける」 町田勝彦……2279

〈随想〉
「恩師」というもの 名誉教授 佐藤幸治……2280

〈洛書〉
心理臨床家の仕事 岡田康伸……2281

〈栄誉〉
藤吉好則理学研究科教授が紫綬褒章を受章
……2282
小林俊行数理解析研究所教授が第24回大阪科学賞
を受賞……2282

〈話題〉
講演「安全と安心の科学」を開催……2283

〈訃報〉……2284

〈日誌〉……2285

〈お知らせ〉
2006年度冬の炭焼き体験会……2286

〈編集後記〉……2286

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

変節期の京都大学に寄せて —財政不堪からの脱却と、俯瞰的 打開とその先の夢をめざして—



研究・財務担当理事・副学長 松本 紘

昨年の10月より、全学の財務、研究推進、宇治キャンパス、産学連携などを担当する立場となり、全学を俯瞰しつつ、個々の問題に対処する多忙な日々を送ることとなりました。気持ちを引き締め責務を果たしてゆくために、ペースメーカーのつもりで、広報室にお願いして京都大学のホームページにある私の理事メッセージ欄に「ニンキ時計」を貼り付けてもらいました。そのニンキ時計が示すように私の任期はほぼ三分の一が過ぎ去りました。一年を振り返る良い機会だと思い、このコラムに書かせて頂くことにしました。

ベルリン大学留学を経て、明治33(1900)年に京都帝国大学法科大学の商法第一講座教授に着任した高根義人教授は、ドイツから自学自習の概念に基づく教育理念を持ち帰りました。それはフンボルトの提唱した近代大学の理念に基づくもので、教員が一方に講義するだけでなく、学生達にゼミナールや実験などを通して研究の現場に参加させ、自らが考え、自らが問題を発掘し、それを解決する能力を育むという教育法です。京都大学はそれを自由の学風、自学自習という概念で実践し、その伝統を守ってきています。最近、競争的資金獲得の際、教育・人材育成の有効な道筋を示すよう要請されることが多くなっています。しかし、京都大学ではすでに百年以上、研究の現場で学生を協働させ、非常に有効な人材育成を実践し、世に有為の人材を輩出してきているのです。勿論、蓄積された知識の伝承や基礎知識の系統的教授も大変重要ではありますが、学部においても大学院においても自らが考える力を学生に与えることが京都大学の方針だと理解しています。特に、大学院では研究を通した自学自習、知的創造の苦闘を乗り越えた歓喜や魅力を研究現場で教えてゆくことが重要でしょう。その意味で研究科も研究所・センターも常に最先端の研究に取り組む教員の姿勢を学生に示すことが必要です。



平成16年に、わが国の大学にとって二度目の大きな節目となった大学法人化が実施されました。京都大学は明治30(1897)年に東京大学に次いで、わが国二番目の帝国大学として建学されました。以来、大

学は二度の大きな変節点を経験しています。一度目は帝国大学から新制国立大学に組織変更された昭和22(1947)年、二度目は大学法人化された平成16(2004)年度です。わが国の大学はおよそ半世紀に一度の大きな変節点を迎えてきたこととなります。今回の法人化によって、大学には大幅な自由裁量権が認められる一方、大学に経営という概念が導入され、国からの交付金が次第に減少するというスキームが設定されています。

この変節期において、放置すれば財政的不堪(貧乏)に陥る大学事情を考慮し、構成する各部局や研究者個人が各部局の対象、方法、言語の差異がもたらす障壁を越える必要があります。新たな京都発の世界観、自然観を有する人間形成を目指す学術研究活動が鍵となるでしょう。そのため、京都という重層文化都市に息づく京都大学の学風である「対話と協同による創造の楽しみの共有」がよりよく発揮されるよう、研究者と大学組織との建設的な連携が保たれなければなりません。

京都大学は、あらゆる学問分野において「彩(あや)」豊かな多様な研究者を有しています。自然科学、医学・生命科学、人文社会学の全てを包含する大規模な総合大学において、人的・物的資源が「綾(あや)」のように織りなされ、大学本来の目的である学術を表す「文(あや)」を総合的に推進できる大学です。京都大学では自由の学風と自学自習を重んじ、数々の人材を世に輩出し、世界をリードする輝かしい研究成果をあげてきました。いわば、京都大学は個性豊かな多彩なアヤ(彩)なす研究者が厳しい対話を通して、アヤ(綾)を織りなし、融合、競合、協調して多元的なアヤ(文)(学問)を創成している「アヤなす学府」と言えるでしょう。平成17年1月に出された中教審の答申「我が国の高等教育の将来像」で示されている大学の機能別分化の第一番目にあげられている世界的研究・教育拠点としての役割を目指した大学

として発展することが京都大学の構成員や社会が望むところと思います。

昨今の行き過ぎとも思える「競争」原理にあまり振り回されず、背筋を伸ばした京都大学らしい学術伝統を守りながら、アヤなす学問の府として、「自由の学風」を継承し、学問の自由を尊重するとの認識が肝要と考えます。法人化後、大学に与えられた自由裁量権を十分に活用し、若者に夢を与え、大学の構成員全員が夢を追えるようになるよう飛躍することが私の夢です。この夢を追うために、着任後、研究推進のあり方や財務方針の策定・改革を工夫し、外部研究資金の獲得支援、基礎学術研究への研究資金援助の方法、研究体制に係る具体的な戦略が重要と考えて仕事をしてきました。

研究推進の面では、新たに研究戦略室を設け、若干の教員にプログラムオフィサー(PO)、プログラムディレクター(PD)にご就任頂き、外部資金獲得支援や、競争的外部資金が入手しにくい基礎学術関係、人文学関係研究者への支援策、さらには萌芽的融合的研究者や若手研究者・女性研究者の研究活動支援のための戦略なども検討してきました。さらに各種競争的資金の獲得の取り組みを強化するために新たに研究支援企画室を研究担当理事のもとに設置することを検討しています。それは、国による学術研究支援のための多様な競争的研究資金のメニューと、総合大学としての多様な研究形態とをうまくマッチングさせ、効果的に獲得するために、競争的資金獲得の支援策の企画、申請書作成支援、情報収集のための東京オフィサーの採用などが必要と考えるからです。

財務面では新しい国立大学法人の財務制度に基づき、大学全体の教育・研究・医療などの活性化、さらには個性化をはかるために財務戦略全体の見直しに取りかかりました。京都大学は、法人化の際に混乱を避けるためにできるだけ急激な変化を避け、徐々に新体制を構築して行こうという方針の下で、激変緩和を念頭に置きながらそろりと新時代を歩み始めました。しかし、私の着任が法人化二年目半ばの平成17年10月であり、そろそろその見直しを行うことが総長の意向と考えました。そこで大学の予算・決算を正確に分析することで、今期中期計画期間中と来期の6年間までを見通した骨太の法人化後の

京都大学の財務の仕組み、方針、戦略を作り上げようとなりました。総長・役員会との密接な連携のもとに、財務委員会、財務部との協議や監査法人による財務セミナーなどを重ねつつ、新しい制度の導入や中長期的視野に立脚した財務戦略などを検討してまいりました。

平成17年度においては、大学全体として一般管理費を抑制するなど、本学の使命である教育研究活動に要する経費(教育研究経費)の比率をより高め、部局への予算配分の圧縮率軽減に努力してきました。

また、本学における教育・研究・医療活動の個性化と活性化のために戦略的・重点的に配分する経費を充実させ、総長や役員会のイニシアティブと責任によって特定課題の教育・研究・医療活動並びにそれらを支える基盤体制へ重点的に予算を配分しています。下記の表はその各種戦略経費を示したものです。

各種戦略的経費

経費名称	使 途
全学経費	全学共通経費 ○本学の教育研究医療活動を一層発展させるための大学として支援が必要な事業(教育研究医療環境整備、教育研究活動支援、キャンパスライフ支援 など)
	全学協力経費 ○教育研究医療活動全般に対する新しい提案 ○中堅設備(概ね2千万円～1億円)の更新・購入
戦略的・重点的配分経費	総長裁量経費 ○教育研究改革・改善プロジェクト経費 ○教育基盤設備充実経費(概ね2千万円以下) など
	重点戦略経費 ○全学的な重点戦略に基づき役員会で精選する教育研究医療活動に対して措置(教育戦略経費、研究戦略経費(若手・女性研究者支援経費含む) など)
	学内貸付資金 ○学内貸付金制度
	基盤強化経費 ○設備等維持費、全学備構や全館施設(寄附建物含む)の運営費 など
教育研究活性化経費	○競争的資金の獲得に向けての取組みを支援
産学官連携推進経費	○産学官連携の推進に向けての取組みを支援
目的積立金	○「教育研究及び診療の質の向上並びに総務運営の改善に充てる」ための経費(教育研究施設の改築・改修、建設)、大型設備(概ね1億円以上)の更新・購入 など

着手した具体的な取り組みとして、計画的に越年度に執行できる研究経費枠の設定、学内貸付財源による「学内向け貸付金制度」の新設、予算の有効利用にもつながる限定的教員発注制度の導入、間接経費や寄附金の一部を財源とする「全学協力経費」の新設などです。これは研究・教育・医療関係の新しいプロジェクトや不足する中規模の設備整備のために、一部の部局の事業であっても、大学全体の将来の発展にとって有用であれば全学的支援を行うとの精神で、ガラス張りの議論の上その配分をするものです。外部資金が得にくい研究、基礎学術研究の支援などに充当するほか、全学的広がりを持つシンポジウム開催の支援にも使える枠組みです。今後、いろん

部局，研究グループからの提案を期待しています。その他，若手研究者や女性研究者支援の戦略経費も重点戦略経費の一部を充てることとしています。また，教育研究活動を全学規模で支える全学機構に対し基盤的経費の配分を安定的に行うことは極めて重要なため，その経費配分を継続的に確保していく新たな財政的仕組みを構築しました。また，教員の確保の重要性に鑑み，総長，丸山正樹企画担当理事・副学長や役員会と議論を重ね，部局長会議の審議を

経て，運営費交付金の物件費で有期雇用教員を採用できる仕組みも進めています。

以上のような小さな努力の積み上げが夢ある大学への確かな一歩と信じて責務に励んでいます。今回は知的財産，産官学連携，宇治キャンパスの諸問題，総合技術部など財務，研究以外の責務については紙面の都合上，触れることができませんでした。またの機会に書かせていただきたいと思います。

大学の動き

京都大学同窓会発足

11月3日(金)午後2時から，時計台記念館において約250人の同窓生・教職員の参加を得て，京都大学同窓会設立総会が開催された。設立総会までに一年あまりの準備を行い，各部局等のご理解・ご協力により当日を迎えることができた。

京都大学同窓会は，学部・研究科等の同窓会をはじめ，地域同窓会やクラブの同窓会，また，同窓会のない部局の卒業生や教職員およびOBで組織する全学のゆるやかな連携組織であり，会員相互の交流と親睦を図り，併せて，京都大学の発展を期し，これに貢献することを目的としている。この目的を達成するために，京都大学の教育研究活動の現況等に係る情報の提供・発信その他京都大学と会員の間または会員相互間の交流及び親睦に寄与する事業が行われる。

設立総会では，木谷雅人理事・副学長より京都大学同窓会設立の経過について説明があり，京都大学同窓会会則および役員についての提案が出席者全員の拍手により承認され，ここに京都大学同窓会が正式に発足した。京都大学同窓会会長に選任された尾池和夫総長から「念願でありました京都大学同窓会がやっとできました。これまで，様々な方に様々なご協力をいただきました。京都大学の教育と研究と社会貢献(例えとして，医療と私はいつも申し上げているのですが)，その活動の内容を，世界の人々に少しでもよく見てもらう，市民の皆様にも見ていた



同窓会設立総会で挨拶する尾池総長

だく，大学を窓だらけにしたいと申し上げるのですが，その一つの窓だと思います。ぜひ，同窓会を通じて情報発信していただくというしほきを大切にしていきたいと思います」と設立にあたっての挨拶と京都大学の現状について講演を行い，京都大学同窓会役員を代表して，地域同窓会の大阪京大クラブ館だち ただす 糾会長と芝蘭会(医学部同窓会)の武田隆男副会長から挨拶が行われた。

その後，京都大学交響楽団のカルテットによる「京都大学学歌」，「琵琶湖周航の歌」を含む記念演奏，さらに松沢哲郎霊長類研究所長の「チンパンジーの親子と文化」と題する記念講演が行われ京都大学が誇るフィールド研究の一端が紹介された。

総会終了後，会場を京大会館に移した記念祝賀会では，尾池総長，参加者代表として株式会社堀場製

作所最高顧問の堀場雅夫氏から挨拶があり、次いで岡本道雄元総長の発声により乾杯、京都大学軽音楽部の軽快な演奏のなか懇親を深め、盛況のうちに終了した。

また、設立総会に先立ち行われたホームカミングデイ(施設見学)では、普段は一般公開していない百周年時計台記念館地下の免震構造や同館迎賓室(旧総長室)、旧石油化学教室(現国際部)や尊攘堂(現埋蔵文化財研究センター)などを巡るキャンパスツアーを行った。担当教職員の解説を受け、案内の学生と言葉を交わして歩いた卒業生の方々からは、変わらない京都大学の趣と、新しく生まれ変わった京都大学の姿に懐かしさと驚きの声があがっていた。

今回、初めて京都大学ホームカミングデイを開催したが、次年度以降についても会員の方々のご意見や各部局等のご協力を得ながら充実した内容で実施する予定である。

今後、会員の方々には京都大学における教育研究の活動状況等をお知らせし、会員相互の交流と親睦を図りつつ、連携を深めることとしている。具体的には、本年7月に発刊した京都大学メールマガジンに登録いただくことにより、最新の京都大学の情報を得ることができる。また、京都大学同窓会ホームページを新たに設けたことにより、各学部等の同窓会からのお知らせや活動の紹介、各同窓会ホームページへのリンクが可能となった。

さらに、各地域で、学部の枠を越えた地域同窓会設立の動きが出てきているが、本学同窓会としては、皆様のご意見を踏まえながら、各同窓会の活動や新たな同窓会の設立への支援をはじめ、様々な活動の充実に努めていくこととしている。

今回、設立総会に参加いただいた方からのご意見を少しご紹介する。

- ・総長による京大の現状と歴史の紹介、松沢教授による記念講演には大変感銘を受けました。
- ・カルテットの演奏も良かったが、背景を取り払った演出がとても素晴らしかった。
- ・久しぶりに母校の見学をさせてもらい感謝している。校内で出土した土器等の説明にも興味があった。また、湯川・朝永両博士の記念展の見学と学

生による丁寧な説明は大変良かった。

- ・湯川・朝永展を見て、京大の創造性の芽を感じました。また旧赤レンガの建物はなつかしく、尊攘堂での発掘文化財に昔の京都の姿が思い出されました。
- ・日頃見ることのなかった京大の歴史を目のあたりにし、感動しました。このような企画を続けてください。
- ・本日は本部キャンパス中心でしたが、北部など他のキャンパス、施設についてもご紹介いただける機会があれば幸いです。
- ・京都で日本で世界で活躍をされている同窓生のお話を聞かせていただく企画や機会に発展させてください。現役の学生達との交流の場も設けていただく企画はどうでしょう。
- ・この全体同窓会の全国的機構をどのように構築したらいいのか。そして、今までの各学部・各専攻同窓会と連携しつつ、共に推進・発展させるのが大問題であり、かつ緊急に解決・発展・融合すべき急務だと考えます。
- ・各学部、学科の同窓会に、この全学の同窓会のことを知らせたいと思います。情報を早い目にお知らせ下さい。(来年のため)
- ・100周年のとき、地方巡回の講演会がありました。何年に一度でも良いので、地方講演会を開いていただきたい。それをきっかけに地方同窓会が開けます。
- ・全体にPR不足を感じる。もう少し多人数の卒業生に案内状を出して欲しい。
- ・社会貢献につながるように、協力体制を!
- ・今後も、京都大学についての情報の発信を期待している。
- ・卒業生等による京都大学への支援の積極化を期待します。

同窓会の情報は京都大学同窓会ホームページをご覧ください。

<http://www.kyoto-u.ac.jp/alumni/index.htm>

メールマガジンは京都大学ホームページから登録していただけます。

http://www.kyoto-u.ac.jp/m_magazine/mm_index.htm

湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念事業

「湯川秀樹・朝永振一郎生誕100年記念シンポジウム―「知」に挑む―荒野をひらく力」

11月4日(土)、京都大学および朝日新聞社主催のシンポジウム「湯川秀樹・朝永振一郎生誕100年記念シンポジウム―「知」に挑む―荒野をひらく力」が約500人の参加を得て、時計台記念館で開催された。

主催者の尾池和夫総長、大塚義文朝日新聞大阪本社編集局長からの挨拶の後、続く基調講演では、佐藤文隆湯川記念財団理事長、森 重文京都大学数理解析研究所教授がそれぞれ、湯川博士との思い出話や、ゆとりの中で業績をあげることができる京都大学の独特の風土について語った。

次に、米沢富美子慶応義塾大学名誉教授、深谷賢治京都大学理学研究科教授、高階絵里加京都大学人文科学研究所助教授、林 重彦京都大学理学研究科助教授をパネリストに、脳科学者である茂木健一郎ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチチャーがコーディネーターを務め、パネル討論が

《湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念事業》

日本で初めてノーベル賞を受賞された湯川秀樹博士と2番目に受賞された朝永振一郎博士の生誕百年を記念し、両博士の業績を広く紹介するとともに、日本の教育・科学の振興に寄与することを目的として、京都大学は様々な事業を実施しています。

○今後の予定等

- ・「素粒子の世界を拓く」湯川・朝永生誕百年記念展
(本学総合博物館・開催中・平成19年1月28日まで)
- ・湯川秀樹・朝永振一郎生誕百年記念式典・講演会等
(平成19年1月23日・湯川博士の百年目の誕生日)

○若手研究者を対象とした「湯川・朝永奨励賞授与事業」を計画中

奨励賞の資金のための募金事業を行っています。

みなさまのご支援・ご協力をお願いいたします。

(詳しくは本学ホームページ <http://www.kyoto-u.ac.jp/yt100/kikin.htm>)



パネル討論の様子

行われた。

この討論では、数学や物理の理論は芸術に通じるという意見や、物理学者と数学者の研究への取り組みの違いについて話題が出され、異分野の研究者ならではの意見交換がなされた。会場からの質問も多数出るなど、盛況のうちに終了した。



シェフィールド大学，マンチェスター大学，ミュンヘン工科大学， 国立清華大学との学術交流

本学と連合王国のシェフィールド大学およびマンチェスター大学，ドイツのミュンヘン工科大学，台湾の国立清華大学は，大学間学術交流協定の締結に

ついて協議を重ねてきたが，このたび本学と各大学の教育・研究の交流と協力を推進するための「学術交流に関する一般的覚書」をそれぞれ交換した。

シェフィールド大学との「覚書」は、尾池和夫総長とシェフィールド大学 Robert Boucher 学長の署名により、平成18(2006)年10月1日に交換された。

同大学は1897年に創設された総合大学。人文科学部、建築学部、工学部、法学部、医学部、純粋科学部、社会科学部の7学部に60以上の研究機関がある。教職員数は6,000人。学部生は20,000人。院生は5,000人。ホームページは <http://www.shef.ac.uk/>

マンチェスター大学との「覚書」は、尾池和夫総長とマンチェスター大学 Alan Gilbert 学長の署名により、平成18(2006)年10月30日に交換された。

同大学は1824年に創設された総合大学。工学・物理科学、人文科学、生命科学、医学・人間科学の4学部23の学科がある。教職員数は10,500人。学部生は26,000人。院生は9,500人。ホームページは <http://www.manchester.ac.uk/>

ミュンヘン工科大学との「覚書」は、尾池和夫総長とミュンヘン工科大学 Wolfgang A. Herrmann 学長の署名により、平成18(2006)年10月31日に交換された。

同大学は1868年に創設された理工系大学。建築、化学、土木工学・測地学、電子情報工学、情報学、数学、機械工学、医学等の12学部がある。教職員数は7,200人。学部生は20,500人。院生は3,000人。ホームページは <http://www.tum.de/>

国立清華大学との「覚書」は、尾池和夫総長と国立清華大学陳文村学長の署名により、平成18(2006)年11月8日に交換された。

同大学は1956年に創設された総合大学。電気・情報科学、工学、原子力科学、生命科学、理学、人文学等の7学部17の学科、18の研究機関がある。教員数は500人。学部生は5,000人。院生は3,500人。ホームページは <http://www.nthu.edu.tw/>

(国際部)

「学生部 危機対応計画」について

学生部では、学生が安心して学習に励むことができるように安全で快適なキャンパス作りを目指し、各方面から現状を点検するとともに安全に関するマニュアルを作成することを目的として平成15年11月10日学生部委員会のもとに林 春男防災研究所教授を委員長とし、学生部委員会第2および第3小委員会委員長ならびに体育会会長等の関係教員で構成する「学生の安全対策検討WG」を設置して「学生を守る」という立場から危機対応の検討を行い、この度「学生部危機対応計画」を作成した。

この「学生部危機対応計画」は、自然災害や人為災害などのあらゆる種類の原因によって発生する非日常的な状況に対して、京都大学の「学生の安全・安心」に関し大学として総合的な連携を行うために、大学がどのような体制でどのような対応をするかについての基本的な指針として作成されたものである。

全学的には個別の危機対応マニュアルの整備が必要と考えられるが、各々の発生原因の状況に応じて基本事項を押さえながら利用するものである。

(学生部)



平成19年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成19年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成19年1月20日(土)および21日(日)の両日に実施される。このため、本学では1月19日(金)の授業を休止する。

試験の概要は、次のとおりである。

- | | |
|--|--|
| <p>1. 期日および試験教科</p> <p>1月20日(土)
公民, 地理歴史, 国語, 外国語, 英語リスニング</p> <p>1月21日(日)
理科①, 数学①, 数学②, 理科②, 理科③</p> <p>2. 試験場(実施担当学部)および受験者数</p> <p>農学部試験場(農学部)
理学部試験場(理学部)
本部第1試験場(教育学部)</p> | <p>本部第2試験場(経済学部)
本部第3試験場(法学部)
本部第4試験場(工学部)
吉田南第1試験場(総合人間学部)
吉田南第2試験場(文学部)
医学部試験場(医学部)
薬学部試験場(薬学部)</p> <p>受験者数 3,636人</p> |
|--|--|

部局の動き

「京セラ文庫『英国議会資料』」開設式を挙げる

11月21日(火)、附属図書館において「京セラ文庫『英国議会資料』」の開設式が執り行われた。

この文庫は、イギリス議会に提出された各種文書(下院1801年～1986年、上院1801年～1922年)を集めた総冊数12,700余冊、総ページ数800万頁を超える資料集成である。平成10(1998)年3月、京セラ株式会社から国立民族学博物館地域研究企画交流センター(当時)に寄贈され、本年4月、本学に地域研究統合情報センターが設置されたことに伴い、移管されることとなった。本学では附属図書館に恒温恒湿設備を備えた文庫室を設置するとともに、同センターが所蔵、管理運営にあたる体制を整え、あらためて京都大学「京セラ文庫『英国議会資料』」として開設するにいたったものである。

式典には、京セラ株式会社から稲盛和夫名誉会長、中村 昇代表取締役会長、人間文化研究機構から長野泰彦理事、文庫の整備に尽力された松原正毅国立民族学博物館名誉教授、本学から尾池和夫総長、丸山正樹理事・副学長、松本 紘理事・副学長、木谷雅人理事・副学長、北 徹理事・副学長、大西有三



尾池総長、稲盛京セラ名誉会長ほか関係者による銘板の除幕

附属図書館長、金田章裕文学研究科教授、田中耕司地域研究統合情報センター長、関係部局長など約50人が出席した。

関係者の挨拶のあと、尾池総長より中村代表取締役会長に感謝状が贈呈され、銘板の除幕、附属図書館の英国議会資料室の見学が行われた。

詳細はホームページをご覧ください。

http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/index.php/bpp_new
(地域研究統合情報センター)

寸言

「夢あれば道が拓ける」

町田 勝彦

家業が化学肥料の製造卸だったことから、跡継ぎにとの期待を受け、京都大学の農学部に入った。それを機に、スポーツも山野を駆け回るものにしたと、スキー部の門を叩きノルディック競技を始めた。当時は知られざるマイナースポーツだったが、それだから面白いと思った。「雪上のマラソン」といわれるように気力と体力の限界に挑む、過酷なレース。観客が誰もいない長いコースで、たまに出会うのは野兎ぐらい。寒風の中で、スキーの滑る音と自分の苦しい息遣いだけを聞いて、もうちょっと、もうちょっとと前進する。手を抜こうとすればいくらでも抜ける。ところが、ストックをあと一回突くかどうかで勝負は決まる。苦しさに妥協すればそれで終わり。そこで自分とどう向き合うか。最後の決め手はあとひと踏ん張りする気持ちにかかっている。ゴールに倒れこんだ後に、やってくる達成感は何にも変えられない。耐える喜びの極致である。この京大スキー部で身につけた精神力と体力が、経営者となった今も大いに役立っている。

「日本の国内でつくるテレビは、すべて、液晶にする！」。大きな“夢”を語ったのは、1998年、社長就任時の記者会見である。かつては、日本のお家芸といわれたブラウン管のカラーテレビも、円高のコスト上昇に耐えかねて、工場の海外移転が、急速に進んでいた。「それにしても、海のものとも、山のものとも知れない液晶に、次を託すというのでは、心細いね」という声が、業界に詳しい人の間から、盛んに聞こえていた。しかし、当時のエレクトロニクス業界で、シャープは弱小メーカーであり、グローバル競争時代には、従来と同じ経営をしては、明日への道は拓けない。特長ある顔に見える企業を実現することが大切と、逆風の中で自らを叱咤激励しながら、粘り強く説得を続けると、



社内のテレビ部門と液晶部門の目の色が変わり始めた。社長が、そこまで腹をくくっている以上、何としても、自分たちの真価を示そうと、奮起したのである。

シャープは、1953年に、わが国で初めて、テレビをつくったメーカーで、以来、半世紀をこえる、技術の蓄積がある。そして液晶は、世界で初めて実用化した技術である。この両部門の開発努力を、どうやって一つに結集するか、どんな形に技術融合するか。それが、私のミッションであった。

幸い当社には、部門の垣根をこえて、人を集め、社長直轄の組織にして、一気呵成に、商品開発や事業を立ち上げる、“緊急開発プロジェクト”という制度があり、この伝家の宝刀を使うことにした。早速、緊プロメンバーを一つの部屋に集めると、侃々諤々討議して、基本の事業構想を固めた。その上で、大型化、高画質化、低消費電力化、コストダウンなど、山積する課題をつぶしていったが、その過程では、「そちらが、そこまでやるのなら、こちらも、もうちょっと考え直してみる・・・」といった具合に、高い目標を粘り強くクリアしていったのである。

一昨年のはじめ、三重県亀山市に、世界にも例の無い、大型液晶カラーテレビの専門工場をスタートさせた。工場の周辺には、有力な部材メーカーや協力工場が集まり、こと液晶については、世界最強のドリーム・チームが、でき上がっている。それもあって、この工場発の液晶テレビは、有難いことに、誰いうとなく、“亀山ブランド”と呼ばれ、画質と信頼性の高さで、圧倒的なご支持を得ている。

昨年には、液晶を中心にする薄型テレビの国内販売台数が、ブラウン管テレビを上回るようになり、今年は、全世界で薄型テレビ時代が到来しつつある。経営者は常に孤独だが、ノルディックで鍛えた精神力が自らの夢を实らせ、大きな道が拓けたように感じている。世界中のご家庭に、日本でつくる、日本ならではの液晶テレビをお届けできるのは、メーカーとして、何よりの喜びである。

(まちだ かつひこ シャープ株式会社取締役社長、昭和41年農学部卒)

随想

「恩師」というもの

名誉教授 佐藤 幸治

来年は古希を迎える。法学部4年生も終わりに近い頃、学者生活は大変だよと平澤興先生にいわれ、一旦銀行に就職したが、静かな書齋生活への憧れに抗し難く、1年2ヶ月で大学に戻った。平澤先生のご忠告の通り、その学者生活は静かとはいい難く、とりわけ平成3年に法学部長に就任して以来大学行政や政府の審議会等に関係し、倉皇として古希に近づいてしまった。



自然科学者西澤潤一氏は、「かく生きたい」という人生観の重要性を語られるが、私自身を突き動かし・支えてきたものは一体何であったかをふと思うことがある。様々な人と本との出会いが脳裡に浮かび、感謝の思いへとつながっていくが、その中でも新潟高校時代の2人の先生との出会いがその「核」のようなものを作っているのではないかと、今にしてますます強く思うところがある。大辞林には「恩師」とは「教えてもらった学恩のある先生」と素っ気ないが、もう少しふくらみのある深い意味があるように思える。そしてそのような「恩師」として、まず何よりもこの2人の先生が心に浮かぶ。

1人は、国語(漢文)の渡辺秀英先生。越後は、自然は厳しく、かつてはしばしば飢饉に見舞われたが、水上 勉のいうように、盲目の旅芸人といわれる瞽女たちを諸方の宿に迎え、無用の人というべき良寛がくち老ゆるまで生きることを可能ならしめた地であった。先生はこの良寛の研究者にして自ら歌を詠まれ、高校卒業後も良寛に関する著書や先生ご自身の歌を送り続けて下さった。「展転総は空 空中且有我」、「形見とて、何かのこさん、春は花、夏ほととぎす、秋はもみぢば」。一見飄々とした先生の風貌を通じて、良寛の風貌を想像しながら、良寛の詩や歌からどれだけ生きることへの勇気を与えられたか知れない。

もう1人は、英語の志賀哲夫先生。先生からは色々な英米の詩人を教えてもらったが、3年生の授業の時、英語をそっちのけにして、語り出したらとまらないといった趣で、西行とその歌について熱っぽく語られた。私が西行に本格的に接した最初であった。後に小林秀雄の「西行」を読んで、そのときのことについての思いを新たにしたが、これが小林への傾倒の契機となった(真偽のほどは確認していないが、後に人から先生は小林の弟子であったと教えられた)。そして小林の「私の人生観」の中で、西行が明恵上人に語ったという歌論に触れたとき、良寛との基調の共通性に驚かされた。西行は、月も花もほととぎす郭公も雪もおよそ相あるところ、皆これ虚妄ならざるはない、であるから花を詠んでも花と思ったこともなければ、月を詠ずるが実は月だと思ったことはない、「虚空ノ如クナル心ノ上ニオイテ、種々ノ風情ヲ色ドルト云ヘドモ更ニ蹤跡ナシ」、といったという。

青年期特有の虚無感から脱却せしめたのは、このような良寛や西行を通じて見られる、無限の時間・空間において1人の人間として今ここにあることへの透明な肯定の姿勢であったのではないかと思う。水上のいうように、良寛は、唯我独尊というよりも唯我独存ともいうべき境地において、厳しい運命をたどるかもしれない子どもたちへの、不遇に喘ぐ病人や貧人への、限らない「同情心」を抱き続けた。

私が、曲折をたどりながらも、ロールズの正義論をベースとするドゥオーキンの「平等の配慮と尊重への権利」論への共感を基礎に、自己の憲法学の土台を「人格的自律権」に置いて構築することになったのは、渡辺・志賀両先生によって蒔かれた、己を含めた人間存在への理解の「種」の発芽であったのではないかと、と此頃とみに思うところがある。人間の幸福のために法学のやれることは限られてはいるが、法学としてやるべきことはやらなければならないとしきりに思う。

(さとう こうじ 元法学研究科教授、平成13年退官、専門は憲法学)

洛書

心理臨床家の仕事

岡田 康伸



いじめの問題や自殺の問題などが最近、新聞やテレビやラジオなどで報道されることが多いためか、これらの問題と筆者の専門と深い関係があるために、「洛書」に何か書いてくれないかと依頼された。いくら専門と関係深く、関心を持ってこれらの問題を見守っているにしても、報道されていることは事件の一部であり、詳しいことがわからないのに、これらの問題にここで、直接触れたり、解決策を示したり出来る訳ではない。しかし、我々心理臨床家が(もちろん筆者だけの考えかもしれないが)考えていることや事件の報道から連想していることなどを述べることは読者に何か刺激を与え、何かに役立つのではないかと考えられるので、執筆させてもらうことにした。

心理臨床家と言っているのは心理的な問題に心理療法やカウンセリングなど心理学的な方法により、心理学的な問題解決をめざして、実践している人たちのことである。事件が起こるとよく「臨床心理士を派遣した」と報道されるのは心理臨床家のことであり、財団法人日本臨床心理士資格認定協会によって認定された心理臨床家を臨床心理士と呼んでいる。スクールカウンセラーも臨床心理士が担当することが多い。この臨床心理士の養成のために認定された大学院が147校あり、毎年2,000名あまりが修了し、資格試験(国家資格ではないが、約20年続いてきている権威あるものと考えられている)を受験し、7-8割が合格している。

我々心理臨床家が基本にしていることを3点に絞って述べたいと思う。一つは聞くことである。心理臨床家はクライアント(子ども)の話を聞くことに全力を注ぐ。簡単なようで実は難しい。大人はましてや学校の先生は忠告や注意やお説教をしたがるのである。子どもの話は聞いていないし、子どもを理解しようとしていない。こどもを理解するためにはまず聞くことだからである。「いじめはなかったと思います」とよくインタビューに答えている校長や教育委員会の指導的立場の

人がいる。これらは子どものことは何も知りませんでしたと告白しているようなもので、先生の本来の業務を忘れていますと言っていると筆者には思える。二つめは「治る」ことをめざしている。「治す」よりもクライアント自らが治っていくことをめざしているのである。心理臨床家はクライアントが治っていくために何が出来るかはいろいろ考えてはいるが、忠告をしたりしないで、クライアント自らが気づくことを待っていると言える。待っているだけかと思う人もいるかもしれないが、実は、待つことはエネルギーもいるし、なかなか難しいものである。指示するほうが楽である。今の社会は効率を考えるあまりクライアントのペースを無視しがちである。また、よく知られているように、「時」にはクロノスとカイロスの2つがあると考えられている。クロノスは時計の時である。正午になるとなんとなくお腹が減っているように思うし、1時から仕事をしなければならぬから、お腹が余り減ってなくても昼食を食べようとする。これはクロノスに従っていると言える。現代人はほとんどがこのクロノスに従っている。二つめはカイロスである。カイロスは時熟のことである。時熟はその気になるまで、すなわち熟してくるまで待ち、熟した時に行動をおこすことである。カイロスに従う例としては、12時にまだお腹が減っていないなら昼食をとらない。お腹が減ったときに食事をしようとする。しかし、これはまわりの人に理解されず、昼食をとるチャンスを逃すことになるであろう。クライアントはカイロスの的である。心理臨床家はこのカイロスを大切に考えている。三つめはその人の全体性(ホロトロピック)を大事にしていることである。自然科学の原理は分けることにある。分割して、考えることによってその科学性を維持している。しかし、我々はそれを全体としてみたいこうとする。悪か善か、勝利か敗北かなどの2分法でないものを考えている。

これら3点だけでも我々の考えが事件からさまざまの人がアドバイスや頑張れという激励や解説していることと微妙に違うと覚えてもらえたであろうか。また、能率を求める現代社会の中では、これらを実施していくのは困難であることが容易に想像されるであろう。われわれ(心理臨床家)はクライアントとともにいかに現代社会に合わせていくか苦勞しているのである。簡単に言えば、問題行動をおこしている子どもはアドバイスが与えられてもそれができな

いから困っているのである。大人が根本的に考え方を
変えないことにはこのような事件は防げないの
ではないかと思う。こどもに問題があるのではなく大

人に問題があるのである。

(おかだ やすのぶ 教育学研究科教授, 専門は心理臨床学)

荣誉

藤吉好則理学研究科教授が紫綬褒章を受章

このたび、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、藤吉好則理学研究科教授が平成18年11月3日(金)に紫綬褒章を受章されました。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介いたします。

藤吉好則教授は、昭和46年名古屋大学理学部化学科を卒業、同49年に京都大学大学院理学研究科に進学し、同57年に理学博士の学位を授与された。昭和55年京都大学化学研究所教務職員、同60年同助手、同62年蛋白質工学研究所主任研究員、同63年同主席研究員、平成6年松下電器国際研究所リサーチディレクターを経て、同8年京都大学大学院理学研究科教授となり、構造生理学を専門として現在に至っている。また、平成11年より理化学研究所播磨連携メンブレンダイナミクス研究グループ生体マルチソームチームチームリーダー、同15年より同18年まで同グループリーダー、同12年より同16年まで産業技術総合研究所生物情報解析研究センター高次構造解析チームチームリーダーを併任された。



藤吉教授は、自ら開発された高分解能極低温電子顕微鏡を用いることにより、細胞の水チャンネルやアセチルコリン受容体、バクテリオロドプシン、各種イオンチャンネルなど、医学や生物学的に重要な細胞の情報伝達を担う膜タンパク質の機能と構造を解析された。さらには脳と神経の機能をタンパク質の分子構造から理解できるようにと、電子線結晶学や単粒子解析法などを用いて膜タンパク質の立体構造解析を進めておられ、構造生理学ともいべき分野を確立された。これらの成果は創薬の開発や病気などのメカニズムの解明にも貢献するものと期待されている。

これら一連の業績が高く評価され、昭和63年に瀬藤賞、平成17年に産学連携功労者科学技術政策担当大臣賞、山崎貞一賞、慶應医学賞、同18年には島津賞を受賞されている。これらに続いての今回の紫綬褒章受章は、まことに喜ばしいことである。

(大学院理学研究科)

小林俊行数理解析研究所教授が第24回大阪科学賞を受賞

小林俊行数理解析研究所教授が、大阪府・大阪市・財団法人大阪科学技術センターの主催する大阪科学賞を受賞されました。本賞は、創造的科学技術の振興を図り、21世紀の新たな発展と明日の人類社会に貢献することを目的として、昭和58年度に創設されたもので、今年が24回目となります。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介いたします。

小林教授は、昭和62年に東京大学大学院理学系研究科修士課程数学専攻を修了後、同大学助手、助教

を経て、平成13年に京都大学数理解析研究所助教授、同15年に同教授に就任された。この期間中、プ

リンストン高等研究所、パリ第6大学、ハーバード大学などの招聘客員教授を歴任され、また学外においては、Journal of Mathematical Society of Japanの編集委員長、日本数学会理事、日本学会会議連携会員などを歴任されている。

今回の大阪科学賞では「リーマン幾何の枠組を超えた不連続群論の創始」と「リー群の無限次元表現における離散的な分岐則の発見」という二つの業績が受賞理由となった。

一つめの業績は、1980年代後半、世界に先駆けてリーマン多様体の枠組を超えた不連続群の研究に取り組む、局所的に均質な高次元空間の大域的な形に関する不思議な現象を掘り起こしつつ、単独でその基礎理論を構築し、幾何学とリー群論にまたがる新しい研究領域を興した、というものである。20世紀のリーマン幾何学は「局所から大域へ」という大きな潮流の中にあっただが、他方、リーマン幾何の枠組を超えてしまうと、局所均質性を課した場合でも、大域的な性質の研究は困難を極めていた。小林教授は、カラビ・マルクス現象の理論的解明に成功し、これを契機として、リーマン幾何の枠組を超えた空間、特に不定値計量をもつ空間における離散群の作用が不連続になるか否かを判定する手法を開発した。さらにその判定法を用いて、基本群の有限性、閉じた空間や有限体積の空間の存在問題、剛性および連続変形の理論、不連続性の双対定理など、局所均質空間の大域理論に根源的な成果を挙げた。

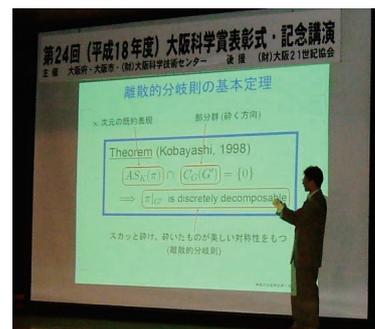
二つめの業績は、無限次元表現論において対称性の破れを記述する「分岐則」の発見に関するものである。以前は、表現の無限次元性から生じる種々の解析

的困難のため、分岐則の統一的な理解はそもそも絶望的だと考えられていた。しかし小林教授は、まず、不連続群の理論を連続化し、そこから無限次元表現を幾何的に構成するという大胆な発想で、連続スペクトラムが現れない分岐則の例を発見し、つづいて、その謎を超局所解析と代数的表現論の手法を組み合わせることによって解明して、本質的なブレイクスルーを引き起こした。

小林教授の離散的な分岐則の理論によって、世界各地で新しい研究が生まれ、さらに、モジュラー多様体の位相・非可換調和解析などの異分野への応用も芽生えつつある。

11月1日に大阪科学技術センターで行われた受賞記念講演では、上記の業績の解説に加えて、最近の研究テーマとして「無重複表現の統一理論」に取り組んでいることが紹介された。

(数理解析研究所)



受賞記念講演を行う小林教授

話題

講演「安全と安心の科学」を開催

宇治事業場では11月13日(月)、今年度の宇治事業場安全衛生年度計画に基づいた安全衛生教育・講習の一環として、村上陽一郎国際基督教大学教授を招き、「安全と安心の科学」をテーマに講演会を開催した。講演では村上教授の著書『安全と安心の科学』をテキストに、最新の具体的な事例についてもお話いただき、講演参加者はメモを取り、熱心に聞き入っていた。

講演終了後、衛生委員会委員との懇談会を開催し、宇治事業場における今後の安全衛生について意見交換を行った。

(宇治地区事務部)



村上陽一郎国際基督教大学教授

訃報

このたび、織田武雄^{おだたけお}名誉教授、佐野利勝^{さのとしかつ}名誉教授、川井^{かわい}浩^{ひろし}医療技術短期大学部名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

織田 武雄 名誉教授



織田武雄先生は、10月18日逝去された。享年99。

先生は、昭和7年3月京都帝国大学文学部(地理学専攻)を卒業、龍谷大学予科・関西学院高等商業学校・立命館大学文学部講師、関西学院高等商業学校教授、立命館大学文学部教授を経て、同22年3月京都帝国大学文学部助教授、同25年11月同教授に就任された。昭和46年3月に停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、昭和53年3月まで関西大学文学部教授を務められた。

先生は、終生、地理学史と地図学史の研究に精力を傾けられた。地理学・地図学の発展とヨーロッパにおける地理的視圏の拡大とを体系的に関連づけた業績、地図の成立と発達を通して多彩な世界観の変

遷を具象的に解明した一連の著作、日本の貴重な古地図類に関する研究などは、地理学界のみならず、歴史学や比較文化論等の諸分野からも高く評価されている。先生は、昭和34年には京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査に参画され、灌漑技術の発生と伝播に関する比較研究に大きな成果を上げられたほか、国内でも共同調査による地域研究の推進に主導的な役割を果たされた。

他方、大学教育や学会運営の面での功績も極めて大きい。戦後、多くの困難に対処して本学地理学講座の再建・拡充に献身されたこと、該博な識見と鋭い感性と温かい包容力とをもって多くの個性的な研究者を慈しみ育成されたこと、また、人文地理学会を創設し、会長として学会基盤を確立されたことは、特筆に値する。これらの功績により昭和53年11月に勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院文学研究科)

佐野 利勝 名誉教授



佐野利勝先生は、10月28日逝去された。享年88。

先生は、昭和16年京都帝国大学経済学部、同21年同大学文学部(独文学科)を卒業後、甲南高等学校教授を経て、同24年に京都大学助教授(分校勤務)、同39年同教授(教養部)を歴任された。昭和49年滋賀医科大学に転出されるにともない、同年京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は、本学分校、教養部を通じ四半世紀の長きにわたって、ドイツ語、ドイツ文学の教育に心血を注がれ、その授業に対する情熱の深さは、その学識の深さ、ならびにその厳しくまた慈愛にみちた人柄とともに、同僚ならびに学生諸子に広く知られたと

ころである。

先生は、20世紀の偉大な思想家のマクス・ピカートのわが国への紹介者であるとともに、自他ともに認めるその研究の第一人者であり、「貧しさ、病い、死をどう考えるか」など、時代の良心ともいふべきものに、たえず鋭い目を注いでこられた。フランクフル、ケラー、ニーチェ、オルテガの研究、ならびに広くドイツの戦後文学の研究などは、深いところで、先生のそうした熱き良心ないしは人間愛によってひとつに結びついている。その意味でも、先生の残された研究には、その真摯な教育姿勢とあいまって、後進の学究への指針となる量り知れないもの、われわれがけっして忘れてはならない最も基本的なものがあつたと言わねばならない。

(大学院人間・環境学研究科)

川井 浩 医療技術短期大学部名誉教授



川井 浩先生は、9月18日逝去された。享年73。

先生は、昭和33年東京大学教育学部体育学健康教育学科を卒業、同34年3月京都大学教養部助手に採用された。その後、三重県立大学医学部助手、同講師、三重大学医学部講師を経て、昭和50年4月京都大学医療技術短期大学部創設と同時に教授に就任され、保健体育、体育実技の授業を担当された。平成9年停年により退官され、京都大学医療技術短期大学部名誉教授の称号を受けられた。退官後は、平成9年6月から同15年3月まで甲賀健康医療専門学校の校長を務められ医療技術者の養成に尽力された。

先生は、身体運動によって招来される生理機能の諸変化、特に呼吸・循環器系について主としてスポーツ選手を対象に測定し、運動生理学、体力学ならびに体育学領域においてトレーニングの実証的研究を幅広く行い、スポーツ選手の競技力向上に貢献された。

先生は、学内においては、教養科主任および一般教育主任として教育運営に尽力された。また、学外においては、日本体育学会理事、同学会京都支部長および京都体育学会会長として体育学の発展に努められた。

これら長年の短期大学教育に対する功績により、平成2年10月文部大臣表彰(短期大学教育功労者)を受けられた。

(医療技術短期大学部)

日誌 2006.10.1 ~ 10.31

10月2日 役員会
 3日 部局長会議
 10日 役員会
 13日 学生部委員会
 16日 役員会
 17日 財務委員会
 ♪ 教育研究評議会

23日 役員会
 24日 施設整備委員会
 25日 経営協議会
 26日 国立七大学学長会議
 30日 役員会
 31日 財務委員会
 ♪ 企画委員会

お知らせ

2006年度冬の炭焼き体験会

1. 日 時：平成19年2月3日(土) 10:00~15:00 (受付開始 9:30 小雨決行)
2. 場 所：フィールド科学教育研究センター里域ステーション上賀茂試験地
3. 内 容：炭焼き体験(原木準備, 原木入れ, 火入れ, 炭出し等), 炭の重量測定, 炭の樹種別火力確認
4. 講 師：フィールド科学教育研究センター教職員
5. 定 員：20名(無料)
6. 申 込 方 法：必要事項(氏名・年齢・性別・住所・電話番号)を明記の上, 往復はがきまたは電子メールのいずれかの方法で申し込んでください。なお, 1人1通の申込みとします。
※個人情報とは炭焼き体験会の運営のみに使用いたします。
7. 申 込 締 切：平成19年1月19日(金)当日消印有効。申込みが定員を超えた場合は, 抽選とさせていただきます。抽選結果は締切翌週にお知らせします。
8. 問い合わせ先：〒603-8047 京都市北区上賀茂本山2
フィールド科学教育研究センター 上賀茂試験地
TEL: 075-781-2404 E-mail: kamigamo@kais.kyoto-u.ac.jp
URL: <http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/kami/event.html>
9. そ の 他：参加対象は中学生以上に限らせて頂きます。未成年の方が申込まれる場合には, 保護者の承諾が必要です。(主催者から保護者へ, 承諾の確認は行いません。承諾がすでに得られているものとして, 申し込みを受け付けます。)
体験会における安全には十分配慮しておりますが, 開催中の怪我等については, 主催者は責任を負いかねますので, 予めご了承ください。

編集後記

京大広報は, 大学の動きを積極的に発信するとともに, 記事の充実を目指しております。次号からは, 本学の遠隔地施設を紹介しますので読者の皆様, 引き続きご愛読をよろしくお願いいたします。

そんなこんなで560号から始まりました編集後記は当分の間休ませていただきます。

広報に関するご意見は, E-mail: kohho52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp にお寄せください。

